
君と僕。

夢希 悪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と僕。

【Nコード】

N9779I

【作者名】

夢希 悪

【あらすじ】

双子の兄弟、悠太・祐希と春、要は幼稚園からの幼なじみ。仲がいいのか悪いのかいまい微妙なところだが、高校生になった今もつるんでいる。そんな彼らがおくる、特に目立った事件も熱血もない毎日。けどなんだかコミカルで、見ているとちょっと胸の奥が音をたてる、ほのぼの青春グラフィティ！ 君と僕。が小説で登場！！

第一話

春もつらら、桜も満開。

桜吹雪が舞い上がるといふより、砂埃の舞う春は育ち盛りの少年たちにとって少しも腹の足しにならない。

そして、屋上には四つの人影があった。

「あー！ー！風強え……。つたく！誰だよ、屋上で弁当食おうなんて言い出したの！！」

最初に声を発したのが眼鏡をかけた男子だった。

そして、次に女子にも見える男子が、なだめる様に言った。

「えー！ー！だって、天気良いのに教室の方がもつたいないじゃないですか」

「おかず砂まみれになる方がもつたいねーつうの！！」

「あつ、じゃあボクのサンドイッチあげます」

さつ、とお弁当を前に突き出す男子。

と、さらに横から誰かが話しかける。

「要^{かなめ}なんかに必要な^{しゅ}いよ春。ちゃんと自分で食べなさい」

「要^{かなめ}ってボンボンでしょ？おかずのーつ二つで何さわいでんの」

「うるせー、いちいち突っ掛かって来るな、双子！……まあ、腹に入っちゃえば同じだけだよ」

「だったら誘った時に断れば良いのにねー」

「ねー！ー！」

そう、その二人は顔が同じでただ一つ違うのは前髪だけだった。

要と呼ばれたのは眼鏡をかけた男子で、春と呼ばれたのは女子みたいな男子だった。

春は髪の毛が以外に長く肩まである事や、童顔であるからして女子に見えやすい。が、唯一男子用の制服（ズボン）のおかげで男子と分かるくらいであった。

要は眼鏡をかけていて家は金持ちのボンボン、学年トップの秀才である。

黒髪で頼れる人だが、意地っ張りなところがある。

双子は兄が悠太ゆうたで弟が祐希ゆうきである。

前髪がセンター分けであるのが悠太、下ろしているのが悠希である。

二人は顔が整っていて女子に凄くモテる。

この四人は穂稀ほまれ高校の二年生になった。

「そういうばやくんと祐希くんは同じクラスなるの初めてでしたよね???どうです??」

悠太と春は五組で要と祐希は四組である。

春がそうたずねたとたんに空気が重たくなった。

要は何もなかった様に本を読み始め、祐希はただチューとジュースを飲む。

春は気まずそうに「…あの…」と場を取り戻そうとし、悠太は春の髪の毛をいじりながら遊んでいた。

「どーもこーも最悪だよ、こいつ。クラスの誰に話しかけられても基本、無視なんだよ」

「えっ!?!?そんなんですか??それってまずいですよ…!」

怒っている要に驚いている春、そして無表情の祐希と悠太。

「別に故意に無視しようなんて思ってないよ、失礼な。ただ、誰の言葉もオレの中にまで響かないだけで…」
「単にお前が人の話を聞いてないだけだ」

それを聞いた春と悠太の頭には祐希がうとうととして今にも眠りそうな姿が浮かび上がり、それに話しかけて困っている女子の姿まで浮かんでいた。

「悠太くん…」

何か言ってくさいよ、と目で悠太に合図を送る。

それに気付いているか否か、定かではあったが祐希と同じく無表情なままで言った。

「いいんじゃない？そういうのも祐希だと思うし…一匹狼といっても誰かを傷付けてるわけじゃないし…」

「無視されちゃあ十分傷付きますよ…」

「だいたい、祐希は協調性が無いっつーか…他人を思いやる気持ちがないっつーか…」

はあと二人（春と要）とも溜め息を出すと急に要が何かを思いついた様に眼鏡をクイツと上げた。

「よし祐希、お前今スグ部活に入れ。今、帰宅部だろ」

「はあ？」

「今お前に不足しているのを補うには部活動が一番手っ取り早い」

放課後

「見学？だったら試しに一緒に試合してみる？」

放課後になり要たちは祐希を連れてバスケット部に訪れた。バスケット部の部長らしき人物に頭を下げる春。

「おねがいします」

「そうさせてもらえよ」

本気だったんだ…

祐希はダルそうにため息を吐いた。

ピーーーーッ

バスケットの試合が始まった。と、いつても練習だが。

互いが互いに一つのボール目指して守ったりパスを回したり真剣な様子だった。

しかし、その試合コート内で祐希ひとりが浮いていた。ダルそうにノロノロと歩いている。

「…祐希くん、あからさまにどうでもよさそうですよ」

「……………あのやろう」

「祐希くんっ」

祐希目掛けてボールが飛んで行く。

「おっ」

待ってましたといわんばかりに要が口から漏らす。

しかし、要の期待とは裏腹に、それを大きな動きをせずに避ける。

「よけるなーっ!!」

祐希に向かって怒鳴り声をあげる。

「だって、向こうが一方的に…。気持ちのおしつけてどうなんですか」

「アホ!!それじゃあチームプレイがなりたたんだろう!!!!」

しかし、どういわれてもダルそうに歩いてるだけだった。

ピーーーーッ

前半終了。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9779i/>

君と僕。

2010年10月13日20時02分発行